

優秀賞

『夕暮れに夜明けの歌を：文学を探しにロシアに行く』

奈倉有里 著、イースト・プレス、2021.

小川 莉理（文学部 臨床心理学科 3年）

ある日のスクールバスの待ち時間に何か一冊と思い、学生選書の書架を眺めていたら、ふとひとつの背表紙に目が止まりました。そのまま本を手にとって見ると、まるで一枚の織物の所々でひとびとがそれぞれの日々を営むその瞬間を切り取った切り絵のような装丁、そして『夕暮れに夜明けの歌を』という対照的なイメージを持つタイトルに一瞬で心を奪われ、すぐに貸し出しカウンターへと向かいました。こうして勢いのままに借りてしまったため、タイトル『夕暮れに夜明けの歌を』に『文学を探しにロシアへ行く』と続いていることに気がついたのは、バスの待ち合い場で本を開いたときでした。思わず心のなかで呟きました。

「ロシア……」と。今、その国に関することを読むだけの覚悟を自分が持ち合わせているだろうか、そういう問いを抱きつつ、頁をめくれば最初の章に「未知なる恍惚」とある。そして、ブラート・オクジャワの『祈り』からの引用、「神よ 人々に 持たざるものを 与えたまえ」とも。私はロシア文学には触れたことがなく、けれど、だからこそ、「未知なる恍惚」という章名とその引用の意味を知りたい好奇心が生まれました。

この本は、作者である奈倉有里さんがどのようにしてロシア語と、そしてロシア文学と出会い、単身ロシアへ文学を学びに行ったのかという話から始まります。未知なる言語と出会うこと、その世界の広がり、新たな言葉の響きを味わうこと、たしかに「未知なる恍惚」としか言えないのだろうと、私自身は言語学習がとても苦手なはずなのに不思議と共感を覚え、また、ロシアでの学びの日々を綴った章では、冷たい風が忍び寄る古い学舎の廊下で、暮れて行く陽の光をぼんやりと見つめる、その耳に聞こえてくる大好きな作品の一節たち。まるで自分が体験した記憶のように、その愛おしさと侘しさを目の奥に感じました。

私事ですが、ここ数年、心身の状態が芳しくなく、身を守るためにあらゆるニュースを見ないようにしていました。見てしまうと涙が止まらなくなり、もうほんとうにどうしていいかわからなくなってしまうからです。でもどこかで、どんな形でもいいから、私なりに今の「世界」と向き合う糸口をずっと探していました。このままでいたくない、と。

本のタイトルも作者の名前も知らずに、不意に惹かれ手に取った一冊の本。

まるで一枚の織物の所々でひとびとがそれぞれの日々を営むその瞬間を切り取った切り絵のような装丁。

編まれていくものにヒビが生まれてしまったらどうしたらいいのか。どう糸を繋いでいけばいいのか。繋ぎ直せばいいのか。織り方は？模様は？これであっているのだろうか。奈倉有里さんの言葉とともにゆっくりと歩み出した私の一歩がどこへ向かうかはまだ分かりませんが、ひとりでも多くのひとにこの本を読んでもらいたいと思い、「私のお薦め本」として紹介することにしました。